

女傑崩壊編 女將軍・遼華

第八章

野望の先

三ヶ月後。

元・西炎国。首都。

かつて遼華が宰相として政務を取り仕切っていた都に、今は老王の旗がはためいていた。城壁に。宮殿の屋根に。遼華が守ろうとした国の象徴の場所に、老王の旗が翻っている。遼華はその旗を見ても、もう何も感じなかった。感じないことに、慣れていた。

宮殿の広間。

多くの文官たちが集まっていた。政務の会議だった。上座に老王が座り、その右隣に——遼華がいた。

黒い官服を纏っていた。高貴な、重厚な官服。黒髪は高く結い上げられていた。首には――何もなかった。首輪は外されていた。昼の間だけ、遼華の首は自由だった。

遼華の双眸は鋭かった。

文官たちが遼華を見る目に、恐れがあった。かつてと同じ恐れが。鉄血の女宰相と呼ばれた頃と、同じ恐れが。しかしその恐れの中に、今は別の色が混じっていた。老王の右腕として座っている遼華への、複雑な感情が。

遼華はそれを、表情に出さなかった。

「では、次の議題ですが――」

文官の声が、広間に響いた。

「待て」

遼華の声が、それを遮った。

冷たい声だった。威厳があった。文官たちが遼華を見た。遼華の双眸が、書類を指した。

「その案では、税収が不足する」

遼華の指が、書類の一点を示した。「ここの試算が甘い。民の実態を見ていない。このように修正しろ」

文官が頭を下げた。「はっ、承知いたしました」

老王は、それを見ていた。

満足そうに。椅子にゆったりと座りながら、遼華が政務を裁いていく様を見ていた。その視線が遼華には感じられた。背中に。首の後ろに。老王の視線の重さを、遼華は知っていた。

(……見ている……)

老王が見ている。この遼華を。かつての鉄血の女宰相の顔をしながら、老王の右腕として政務を裁く遼華を。

遼華は書類に視線を戻した。

奇妙だった。この官服を纏い、この広間に座り、文官たちを動かしている時——遼華は遼華だった。鉄血の女宰相だ

った。政務の感覚が、身体に戻ってきた。書類の数字を見れば問題点が見える。文官の言葉を聞けば何が不足しているかわかる。その能力は、後宮での日々の中でも消えていなかった。

しかしその能力を、今は老王のために使っていた。

かつては西炎国のために使っていた能力を。かつて老王と対峙するために使っていた能力を。今は老王の征服した土地を治めるために使っていた。

それが遼華には——奇妙と感ずることすら、もう薄れていた。

「北の物資輸送についてですが」

別の文官が口を開いた。遼華の視線が、そちらに向く。話を聞きながら、頭の中で計算する。輸送路の効率。兵站の問題。老王の次の征服に向けた準備。遼華の頭は動いていた。かつてと同じように。

その時——。

広間の扉が開いた。

深紅の髪。艶やかな衣装。胸元が大きく開いた、曲線を強調する衣装。

ルカだった。

ルカはしなやかに歩いた。猫のように。文官たちの視線が集まった。遼華の視線も、一瞬だけルカに向いた。昼のルカの姿を、遼華は見るたびに奇妙な感覚を覚えた。

夜のルカを知っているから。

四つん這いで老王の逸物を求めるルカを。首輪をつけて啼くルカを。そのルカが今、艶やかな衣装を纏い、老王の懐刀として広間に立っている。

ルカは老王の耳元で囁いた。「老王様、お話があります」

老王は頷いた。「わかった」

老王は立ち上がった。「会議は、遼華に任せる」

老王とルカが退室した。

文官たちがそれを見送った。遼華も、それを見送った。表情を変えずに。

扉が閉まった。

文官たちの視線が、遼華に戻った。

「続けろ」

遼華の声が、広間に響いた。冷たく。威厳を持って。

会議が再開された。遼華が全てを取り仕切った。老王がいない広間で、遼華の言葉だけが政務を動かした。文官たちは遼華の言葉に従った。恐れながら。敬いながら。

遼華はそれを、当然のこととして受けた。

しかし広間の隅で、遼華の胸の奥で——何かが、ざわりと動いていた。

かつてはこの力が、西炎国のためにあった。今は老王のためにある。その違いが、遼華の中でどんな意味を持つのか。遼華はその問いに、後宮に来てからずっと答えを出せていなかった。出せないまま、政務を裁き続けていた。

書類を処理しながら、遼華は思った。

（……私は今、何者だ……）

鉄血の女宰相か。老王の雌犬か。

答えは出なかった。

しかし会議は続いた。遼華の頭は動き続けた。書類の数字が、輸送路の問題が、税収の試算が、遼華の前に次々と積みまれていく。遼華はそれを一つずつ裁いていく。

どちらでもあった。

どちらでもあって——どちらでもあることに、もう遼華は驚かなかった。

別室では、老王とルカが向き合っていた。

「北の国境で、動きがあります」

ルカの声は低かった。しかし確かな声だった。情報を伝える者の、明晰な声。昼のルカは、こうだった。老王の懐刀として。情報を集め、整理し、老王に届ける。その仕事を、ルカは完璧にこなした。

「敵国の偵察兵が、三名。我が軍の配置を探っていました。すでに捕らえております」

老王の双眸が、ルカを見た。「よくやった」

老王の手が、ルカの頭を撫でた。

ルカの唇が、わずかに笑んだ。「ありがとうございます、老王様」

その笑みを、遼華は見えていなかった。しかし遼華には想像できた。夜のルカの笑みとは違う笑みが、そこにあること

が。しかしその違う笑みの奥に、夜と同じ何かが宿っていることも。

「拷問して、情報を吐かせろ」

「承知いたしました」

ルカは老王に近づいた。老王の首に腕を回す。「では、お褒美をいただけますか？」

老王は笑った。「夜まで待て」

ルカの唇が、老王の耳元で囁いた。「楽しみにしております」

ルカが部屋を出た。しなやかに。

老王はその後ろ姿を、満足そうに見送った。

会議が終わった頃、遼華は広間の窓から外を見た。

老王の旗が、風にはためいていた。

かつて西炎国の旗があった場所に。かつて遼華が守ろうとした国の象徴があった場所に。

遼華はその旗を見ていた。

何を感じているか、遼華にはわからなかった。喪失か。諦念か。あるいは——もう何も感じていないのか。後宮での日々が、感情の輪郭を少しずつ変えていた。鋭かったものが丸くなっていた。深かったものが浅くなっていた。

しかし——。

政務は、できた。

この能力だけは変わっていなかった。書類を読めば問題点が見える。人の言葉を聞けば嘘がわかる。数字を見れば全体が見える。その能力が、今は老王のために動いていた。

(……これでいいのか……)

問いが浮かんた。

答えは出なかった。

出なかったまま、遼華は窓から視線を外した。次の書類を手を取った。老王の征服した土地を治めるための、次の政務が待っていた。

遼華の双眸が、再び鋭くなった。

鉄血の女宰相の双眸に。

そして夜が来るまで、遼華はその顔で政務を裁き続けた。

夜。

老王の私室の扉がノックされた。

「入れ」

扉が開いた。

遼華とルカ、二人が入ってきた。

しかし——二人の姿は、昼とは違った。

遼華の黒い官服は脱がれていた。ルカの艶やかな衣装も。

二人とも全裸だった。首には首輪が嵌まっていた。「鉄血

の女宰相、雌犬に墮つ」。「紅蓮の女帝、雌犬に墮つ」。

二人の首輪が、灯りを反射していた。

二人は四つん這いで老王に近づいた。

二匹の雌犬として。

遼華は床を進みながら、この感覚を知っていた。昼の遼華と夜の遼華が、自分の中に並んで存在していることを。広間で文官たちを動かしていた遼華が、今は床を四つん這いで進んでいる。その落差を、遼華はもう驚かなかった。ただ――夜が来るたびに、その落差の深さを全身で感じた。

老王の声が、響いた。

「よく来た」

老王の手が、二人の頭を撫でた。「今日も、よく働いたな」

「ありがとうございます、老王様」

二人の声が揃った。

遼華は老王を見上げた。昼、広間で見ていた老王と同じ顔だった。しかし今の遼華の目には、その顔が違って見えた。昼は老王を主君として見ていた。今は——所有者として見ていた。その違いが、遼華の胸の奥に奇妙な熱をともした。

老王は立ち上がった。衣を脱ぐ。老王の逸物が露わになる。

遼華の秘所が、それを見た瞬間に反応した。

じわりと、潤んだ。

昼の広間での遼華の双眸は冷徹だった。書類を見る目だった。文官を動かす目だった。しかし今、老王の逸物を見た遼華の身体は正直に答えていた。広間での冷徹さとは別のところで、身体が答えていた。

老王の声が響いた。「今日は、特別なことをする」

「お前たち二人で、俺の逸物を清めろ。そして——互いに辱め合え」

遼華の双眸が、揺れた。

「恥辱を、快感として受け入れろ」

二人は老王に近づいた。四つん並いで。二人の舌が、老王の逸物に触れた。遼華の舌と、ルカの舌が。根元から先端へ。丁寧に。老王の逸物の熱が、舌尖から伝わってくる。

遼華は舌を動かしながら、隣のルカを見た。

昼のルカを思い出した。老王に情報を届けるルカの、低く確かな声を。しかし今ルカは遼華と並んで老王の逸物を舐めていた。深紅の髪が床に垂れ、琥珀色の瞳は情欲に濡れていた。しかしその奥の明晰な光は消えていなかった。すべてを理解した上で、今この場所にいる者の光が。

二人の舌が、老王の逸物の先端で触れ合った。

老王の手が、遼華の頭を押した。「遼華、口に含め」

遼華の口が、老王の逸物を含んだ。大きい。口の中がいっぱいになる。老王の熱が、口腔に広がる。老王の手が遼華

の頭を押す。逸物が喉の奥まで達する。遼華の喉が反射的に締まった。涙が滲んだ。

しかし遼華は、それを受け入れた。

昼の遼華が文官を動かした同じ口が、今は老王の逸物を含んでいた。その事実が、遼華の頭の中でゆっくりと形を作った。どちらも遼華だった。どちらの口も、遼華の口だった。

老王の手が離れた。逸物が口から抜ける。

「ルカ」

ルカの口が、老王の逸物を含んだ。同じように。深く。ルカの双眸から涙が溢れる。しかしルカの表情には、受容があった。抵抗の欠片もなかった。

老王の逸物がルカの口から抜けた。

「では、次だ」

老王の双眸が、二人を見た。「遼華、ルカの尻尾を抜いて、また挿入しろ。ゆっくりと。丁寧」

遼華の双眸が、大きく開いた。

「……………」

遼華の手が、震えた。

ルカの尻尾に触れることと、老王の逸物を受け入れることは、違う恥辱だった。老王との行為は——もう遼華の身体の一部になっていた。しかしルカに対してこれをする——別の種は——かつての恋人に対してこれをする——別の種類の恥辱だった。

しかし老王の命令が響いていた。

遼華の手が、ルカの臀部に触れた。

震える手で。ルカの後孔に挿入された尻尾の台座に触れる。ゆっくりと、引き抜き始めた。

ルカの身体が震えた。「あ……………」

尻尾が抜かれた。ルカの後孔が、ぽっかりと開いたまま残った。遼華の手が尻尾を持ったまま、一瞬止まった。

そして――再び、押し込んでいく。

ゆっくりと。丁寧に。老王の命令通りに。

「んっ……！」

ルカの身体が震えた。受け入れていく感覚が、ルカの表情に浮かんた。恍惚に近い色が。

老王の声が、笑った。「いいぞ」

「では、交代だ。ルカ、遼華の尻尾を」

ルカの手が、遼華の臀部に触れた。

遼華の身体が、強張った。

ルカの手だった。かつて遼華を愛した手だった。その手が、今は遼華の後孔に挿入された尻尾に触れていた。引き

抜く。遼華の身体が震えた。「あっ……！」後孔が開いたまま残る感覚。そして——再び押し込まれる。

「んっ……！ あっ……！」

遼華の秘所が、蜜を溢れさせた。

(……なんで……こんなことで……)

しかし身体は正直だった。ルカの手に辱められることへの恥辱が、快感に変わっていた。遼華はその事実を、全身で感じていた。

老王の声が、響いた。

「お前たち二人、互いに辱め合っている。どうだ？」

遼華とルカ、二人の双眸から涙が溢れた。

しかし——二人の秘所は、濡れていた。蜜が溢れていた。

恥辱が、快感になっていた。

老王の声が続いた。「そうだ。お前たちは、恥辱すらも快感として受け入れる」

老王はベッドに座った。「さあ、来い」

二人は老王に近づいた。四つん這いで。

「今日は、二人同時に抱く」

老王は遼華の身体を抱き上げた。老王の逸物の上に、座らせる。遼華の秘所に、老王の逸物が侵入する。

「あっ……！！」

充実感が、全身に広がった。老王の逸物で、満たされる。昼の会議が遠くなった。書類が遠くなった。文官たちの顔が遠くなった。今この瞬間、遼華の全身にあるのは老王の逸物の熱だけだった。

老王の手が、ルカを引き寄せた。

ルカの顔を、遼華の秘所に近づける。老王の逸物が入りする、遼華の秘所に。

「ルカ、舐めろ」

ルカの舌が、遼華の秘所に触れた。

「あっ……！ んっ……！」

老王の逸物とルカの舌が、同時に遼華を刺激した。二つの感覚が重なる。老王の逸物の深さと、ルカの舌の繊細さが、混ざり合う。遼華の身体が跳ね続けた。

「あっ……！ あっ……！ はっ……！」

ルカの舌が敏感な場所を見つけた。そこを執拗に刺激する。老王の腰が動き続ける。二つの快感が積み上がっていく。遼華の思考が、白くなりかける。

昼の遼華が消えていく。

鉄血の女宰相が消えていく。

今ここにあるのは——老王の逸物と、ルカの舌と、遼華の身体だけだった。

「あっ……！　くるっ……！　またくるっ……！！！」

「あっ……！　ああっ……！　いやっ……！　いやあっ……！！！」

老王の声が響いた。「絶頂しろ」

「ああああああっ……！！！」

絶頂した。

遼華の身体が激しく痙攣した。老王の逸物を締め付ける。ルカの舌がまだ動いていた。二重の刺激の中で、絶頂の波が長く続いた。視界が白く染まる。

老王の逸物が、遼華の秘所から抜かれた。

遼華はベッドの端に横たわった。荒い息をつきながら。昼の鋭さは、もうどこにもなかった。

老王はルカの身体を抱き上げた。ルカの秘所に、老王の逸物が侵入する。「あっ……！！！」ルカの嬌声が部屋に響いた。

老王の手が、遼華を引き寄せた。「遼華、舐めろ」

遼華の顔が、ルカの秘所に近づけられた。



老王の逸物が入りするルカの秘所が、目の前にあった。

遼華はそこに舌を伸ばした。ルカの蜜の味が舌に広がる。

老王の逸物の感触が、舌に触れる。

「んっ……!! あっ……!!」

